ひょうすんぼの謀りごと

昔々、毛作の山の中に、なかなか知恵のある狐と、三ッ橋（畑田のガソリンスタンド付近）の竹やぶに、たいそう偉い狸が、住んでいました。2匹とも大変な自慢屋で、化け方では、お互いにゆずらず、よくけんかしましたがなかなか勝負がつきませんでした。

ところが、小薄（おんづき＝平原の大きな池で、あしが茂り、ワクド〔ガマカエルのこと〕や大蛇が出て、人があまり寄りつかなかった）のひょうすんぼ（河童（かっぱ）のこと）が出てきて、まあ、まあということになりました。

そして、ある秋の満月の晩のことでした。ひょうすんぼがやってきて、狐と狸を呼びだしていいました。

「向こうの方から、神祭り帰りの爺さんが、重箱づつみをぶらさげて、ふらり、ふらりとやってくるが、どちらが気付かれずに、あの重箱のご馳走を、取り上げられるか、やってみよ。」

とけしかけました。

毛作の狐は、すばやいことで有名でした。早速きれいな娘さんに化けて、

「アイタタ、アイタタ・・・・・・」

と苦しそうに、お腹をおさえて、しゃがみこみました。ふらふらと、近づいてきた爺さんは、

「娘さん、娘さんどうしたのか、お腹でも痛むのか。」

とかがみ込んで、尋ねました。狐はそのすきに、サッと重箱を取って、逃げようとしましたが、あいにく重箱は手ぬぐいで、腰にしっかり、ゆわえつけてあったので、失敗してしまい、ほうほうのていで、帰ってきました。

今度は狸の番になりました。狸は大きなお腹を、精一杯つき出しながら、道いっぱいに広がるような、大きい石に化けて、橋の上に、ゴロリと横になり、タヌキ寝入りをはじめました。そんなこととはつゆ知らず近づいて来た爺さ

うらへ

んは、この大きな石を見て、のけようとしましたが、大きな石はびくともしません。なかなか動きません。何度もやったあげく、つかれた爺さんは、やれ、やれといいながら、とうとう石の上に腰をおろしました。おまけにウト、ウトと居ねむりまで、はじめてしまったのです。狸はこれ幸いと、腰に結んだ重箱を、取りにかかりましたが、いくら手をのばしてもないのです。爺さんは先程、狐にとられそうになったので、どうやら、ふところに入れたらしいのです。よーし、それなら、ニューッと長い手をさしのべ、ソーッと爺さんのふところに入れました。そのとたん、爺さんは、大きな口をいっぱいに開けて、タヌキの手に、ガブリと噛みついたのです。多分夢でも見ていて、ご馳走が出たと、間違えて食べようとしたのでしょう。

タヌキは、いきなりかみつかれたので、びっくりして「アイタタタ・・・・・・。」と、悲鳴をあげたとたんに、正体がばれて、失敗に終ってしまいました。

それを見ていたひょうすんぼは、笑いながらいいました。

「お前達は、あんまり欲が深いから、失敗したんじゃあ自分の智恵におぼれるから駄目なんだよ。人間をだます方法なんか、簡単じゃよ。」

と、なおも笑いました。

狐と狸は、ひょうすんぼの話を聞くとすぐに、「それはどんな方法じゃあ、教えてくれ。」と聞くと、ひょうすんぼが、笑いながら答えました。

「雨のしょぼ、しょぼ降る晩に、ご馳走をもってきたら教えてやる。」といいました。

狐と狸は、それを聞くと本気にして、ある雨のしょぼしょぼと降る晩に、ご馳走をたくさんかかえて、ひょうすんぼが現われるのを、いまかいまかと待っていました。

やがて、「ヒュール、ヒュール・・・・・・。」と近くで、また遠くの方で、ひょうすんぼの鳴き声が、聞こえてきます。しかし、ひょうすんぼの姿は、一向に見かけることができません。あっちでウロウロ、こっちでウロウロとしているうちに、とうとう夜が明けてしまいました。

狐も狸も夜が明けると、人間につかまってしまいますので、スタコラサッサと、自分のねぐらに、逃げて帰りました。そして2匹が持っていったご馳走は、そっくりそのまま、ひょうすんぼが、いただいてしまいました。

次の日も、又その次の日も、声だけは「ヒュール、ヒュール・・・・・・。」とするのですが、姿は一度も、見せなかったということです。

※このお話は、本田さん（70才）が、幼い頃おじいさんから、よく聞かされたそうです。

（採話：平原地区　本田親徳）

昭和61年8月発行　たかなべむかしばなし第一集

令和6年6月21日発行　発行　高鍋町教育委員会　社会教育課　高鍋町大字上江8335番地2　TEL 0983-23-3326

デザイン･イラスト：ごとうきよ